

様式 3

佐賀城本丸歴史館協議会議事録

- 1 開催した会議の名称 令和7年度佐賀城本丸歴史館協議会
- 2 開催日時 2026年3月23日(月) 14時から15時20分まで
- 3 開催場所 佐賀城本丸歴史館 会議室
- 4 出席者 委員：高野委員、栗屋委員、秋次委員、富永委員、
長谷川委員、中尾委員、古賀委員、福岡委員、鶴原委員
オブザーバー：佐賀城本丸ボランティア 岡会長
事務局：七田館長、徳島統括副館長、
古川プロジェクトマネージャー、宮崎副館長、
安永課長、堤主任主査、岡田主事
- 5 議題 (1) 令和7年度事業実施状況について
(2) 令和8年度の事業計画について
(3) その他

6 会議録

会議の冒頭、七田館長から挨拶があった後、議事に入った。
(事務局より配布資料に基づいたパワーポイントにより説明)

(委員)

飲食を伴うイベントを実施しているが、前例はあるのか。

(事務局)

飲食を伴うイベントは今年度が初めての試みとなる。

飲食は原則禁止だが、「奥」エリア情報発信イベントで実施の時代食ディナーについては、閉館後貸し切りの状態で、博物館としての安全管理体制を整えた上で実施した。

(委員)

時代食ディナーは、献立表などを基にプロに作っていただいたのか。

(事務局)

当時の記録を参考に再現され商品化されている料理に数品を加えて提供した。

(委員)

発掘調査について、奥座敷が見られるのは全国的にも珍しいと聞いた。折角の発掘調査であるから、珍しい一部の箇所でも復元が出来ないかと思うが、どのように考えているのか。

(事務局)

様々な可能性を検討できるよう、情報収集を目的として発掘調査を実施している。予算や県民の皆様の要望なども踏まえながら、将来的には復元についても検討できればと考えている。

(委員)

復元には予算も必要だと思うが、クラウドファンディングや県外からの来館者に入館料を導入するなど、様々な制度の活用や料金徴収も考えてもらいたい。

(事務局)

いただいたアイデアも含めて、将来的に検討したい。

(委員)

発掘調査の成果を何らかの形で還元してほしい。令和8年度も「佐賀城を知る」テーマ展が開催されるが、最終的により大々的な形で取り上げるなどの予定はあるのか。

(事務局)

来年度も引き続き発掘調査を実施し、再来年度に調査成果をとりまとめる。これらの成果はしっかりと発信していく必要があるという認識。展覧会についても具体的には未定だが実施したいと考えている。

(委員)

前年度からテーマ展の際にはパンフレットを作成されている。会期後も資料を確認でき、非常にありがたい。記録に残すという点からも今後も続けていただきたい。

(事務局)

承知した。作ること自体が学芸員の経験にもなるため、事務局としても今後も続けたいと考えている。

(委員)

発掘調査について、庭園の遺構がないというのはどういうことか。

(事務局)

江戸時代中期頃まであった池を埋めて天保期に新しく池を作っており、新しい部分は近代以降の工事で削られる等により無くなっている状態。
天保期以前の部分は輪郭が分かっている状態だが、発掘調査終了後、資料をもとにさらに検討を重ねていく。

(委員)

研究紀要について、インターネット上で公開している所もあるが、本丸歴史館はインターネットでの公開は行わないのか。

(事務局)

現状インターネット上での公開は行っていない。著作権の問題などクリアすべき課題もあるが、今後検討したい。

(委員)

研究紀要の過去のアーカイブも是非整えてもらいたい。

(事務局)

承知した。

(委員)

佐賀城というロケーションは大変価値があるもの。城の中だけでなく、堀の辺りの外観も活かしたイベントを実施してほしい。

(事務局)

関係の団体とも協力しながら、佐賀城の雰囲気を感じていただけるようなイベントの実施について提案、検討していきたい。

(委員)

資料収集なども大事かと思うが、予算規模はどのようになっているか。

(事務局)

資料整備費については、令和7年度は約200万程度が配分された。

常設展示費についても、パンフレットや資料借用に係る輸送費を踏まえ、必要な予算を確保している。また、募金も活用しながら、順次外装木部塗装や畳替えなどを実施しているところ。

来年度予算についてもおおむね同程度の予算を確保しており、今年度と同規模のイベントや展示を実施できる見込み。発掘調査についても必要な予算を計上している。

(事務局)

江藤新平復権に向けた様々な取組があっているが、今後どのような形で江藤新平について発信していくのか。

(事務局)

復権事業については、昨年度途中から文化課（佐賀復権推進チーム）に事業が移行して進められている。特別展で制作した映像を中学校教材として活用し江藤新平の功績に対する理解を深める取組などを、当館も一緒に行っているところ。